

民衆の戦場詩について

高崎, 隆治

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

1970-03-27

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019240>

民衆の戦場詩について

高 崎 隆 治

15年戦争、特に中国への全面侵略を開始した昭和12年以降20年の敗戦まで、この国の文学がどれほどの荒廃を露呈したか、その逐一をここで詳細に論じるとまはないが、散文のジャンルに限っては志賀・谷崎・永井といった、いわゆる大家と呼ばれる何人かの文学者や宮本百合子等が、遂に戦争護美の作に手を染めず、文学者としての矜持を保ち得たにもかかわらず、詩の分野においては、一般に日本近代詩の最高峰といわれる高村光太郎以下、佐藤春夫・室生犀星・北原白秋をはじめ、ほとんど全詩人が、あげて好戦・侵略の徒と化す、まさに惨憺たる敗北の絵図を展開するにたまたったのであった。

したがって、観念的で空疎な、詩と呼ぶに値しない無内容なそれら侵略詩のすべては、今日の観点からはまことに滑稽なそれらに言葉の羅列にすぎず、たとえ日本近代詩史の否定的媒介とするにしても、今ことあらためてそれを取上げることとは何ほどの積極的意義をもち得ないであろう。

だがそうはいうものの、最近の詩人研究にみられる顕著な偏向―

―一時期のそれらの作品をぬきにして、肯定的又は積極的な詩篇のみによって詩人を評価することはまことにおかしなことであるし、あるいは又、この時期の詩をすべて侵略詩とのみ片付けて、近代詩史を綴ることも不毛であることにはわりはない。

といって、今さら私は、彼等の戦争詩を、ここに再録再公開するほどのせつかいやきでありたいとは思わない。

では、私がここでもくろんでいることはどういうことか。それは、この時期における民衆兵士の戦場詩を発掘すること、そしてそれらに若干の検討を加えることで問題の提起を行なおうというのである。

民衆（無名詩人）も又、「詩人」たちと同様の無内容な詩をうたっていたかどうか、私の興味はほとんどその一点につきるといってもよい。

だが、残念ながら、文献として残っているだろういくつかのそれら詩稿を収集することは、もはや現時点においてはかなり困難な作業であり、専門詩人の作品ですら印刷や用紙事情が切迫していたこ

の時期において、それは二重の意味で至難なわざといわねばならぬ。のみならず、それが戦時下の出版であるかぎり、検閲の目はきびしく、合法出版の範囲において反戦詩は絶対に存在し得ないであろうことは疑う余地がない。

しかし、たとえ反戦や厭戦の詩はなくても、そこに民衆の感情や思考がどれほど歪んだ形状で表白されていようと、民衆の、特に戦場における彼等の人間感情や思考方法がどのようなものであったかを知ることが、極めて重要なことである。つまり、私の仮説は、戦争を砲弾の圏外から眺めていた「詩人」たちとは本質的に相違する何か、直接に銃火を浴び続けた彼等を捉え、彼等の詩魂をゆさぶったにちがいないということであり、そうである限りにおいて、民衆の戦場詩は発掘され新しい価値を付与されねばならないということなのだ。

むろん、もともと、詩人ではない彼等に、詩人としての専門的な知識体系や、洗練された技巧等を望むことはまちがいだし、その面からの考察に耐える詩篇を期待することは不可能であろう。おそらくそれは詩以前の、素材をそのままなげだした、荒けずりで無器用な態のものばかりであろう。まして、戦火の中で創作したものであれば、十分な時間的余裕も情緒的な安定も欠き、参考となる書物はおろか、一片の活字にすら飢える状況下では、その時、その瞬間の詩情を、断片的にメモすることが、精一杯の作詩活動であったにちがいないのである。

そういった、あらゆるマイナスの条件下で詠いあげられたものの中から、幸いにして拾い得たいくつかの詩篇をここに取上げてみることにする。ただし、すでに、たとえば戦没学徒の遺稿として戦後

に刊行された「はるかなる山河に」「きけわたつみの声」等に集録されているいくつかの詩篇については、発掘の意味をなさないもので、ここでは省略することにする。それらの詩稿と、戦時下合法出版の以下の諸篇と、どれほどの差異があるかを検討することも、まことに興味をそそる問題にはちがいないが――。

「かれら」 (毛利狂平)

天官賜福

正月だといって彼等は
去年のとはりかえた

いまにも「幸ひ」をもたらしそうにそれはあざやかに輝いてい
るけれど

すすぼけた柱にくつきりと赤いのはあまりにも眼が酷い……
――が

その下で七・八本
五寸ばかりの薪を

そのうちの一本で枕にして
ていねいに並べ

天日にほし
間をおいては

傍から腕をのばして裏がへしてゐるのを見たら
涙がにじむほど

ほほえまなければいけない

「かれら」とはむろん中国の民衆である。「幸ひ」とはほど遠い生活の断面を象徴する僅かな薪を陽に干し裏返している彼等をながめて、涙をにじませほほえんでいるのは、兵士つまり作者である。ここには、それが可能な唯一の、そうするよりほかにどうしようもない兵士のヒューマンな感情が横溢している。

この詩が載っている『兵隊の祝祭』は、南支派遣軍の発行したものである。「雑誌『兵隊』創刊四周年記念」と銘をうち、現地の広東で印刷、編集は「雑誌兵隊編集室」と記されている。昭和18年10月発行というから、すでに太平洋戦争の段階に突入し、次第に敗色の濃くなっている時期である。詩と短歌と俳句が、三百五十人ほどの兵士（将校らしく思われるのは数人）等によって詠まれている。火野葦平以外はすべて無名の人々であり、型どおり最高指揮官や報道部長らの序文が付されてはいても、作者も編者（選者）も無名の民衆である点に、民衆の戦場における詩歌集として、代表的なものであるにちがいない。個人の詩歌集でもなく営利出版でもなく、軍服をまとってはいるが、多種多様な人々が名を連れ、それだけに、そこにあらわれた詩情はさまざまな側面をもち、少女的な幼ない感傷から、専門詩人を做った空疎な掛け声にいたるまで、まさに玉石混交の世界である。しかしながら、前記の如き「かれら」に対する限らない親愛と同情に満ちた真情を、率直に吐露する民衆詩も、又、次のような戦場の真実を伝える詩稿もけっして少数ではない。

「一本の樹」 (俣野 衛)

夕べ

幾千の兵隊は

懸崖を攀ち草叢をわけて

蟻のように

月光にけぶる山嶺を越えて行った。

夜明け

チェッコ銃は

山かげに炎のような舌を吐き

立ちのぼる雲の中から

死は

氷花のやうに咲き匂ふた。

輪転機は

シネマより簡単に

それら戦争を再現するが

一本の樹が

拾の不幸の中で護られ

一本の樹が

火のような兵隊の血で購はれるのだと誰が知らう

「幾千の兵隊」はむろん日本の兵士であり、「チェッコ銃」は中国軍の代表的兵器である。これは日本軍の、いわゆる連戦連勝といった喧伝を否定する戦いである。犠牲はむしろ日本の側に多いこと

を指摘している。

民衆の詩歌は、文学史上、いつの時代にもいつの場合にも平易である。ことさらにもってまわったような表現はとらないし、てらった難解な辞句をもてあそぶこともない。この詩もその例にもれないうが、しかし、「一本の樹」が何をさしているのかははっきりしない。しかしながら、それは「拾の不幸」に対置されていることを考へれば、漠然とながらも、無数の民衆（兵士）の反対存在を意味していることは明白であろう。

「あをい おびひも」 (毛利狂平)

乗船するとき

一金二円五拾錢也 と札がついて

みかん バナナ りんご

——と美しくつまってゐる籠を二個

せはしく帯の紐をはずして

結びつけてくれた母……

青い帯紐

私は

高い胸つく舷側のはしごを

果物籠二個を

ふりわけにかついでのぼった

〇〇月——

私は今日も

せっけん二 ふんどし三 たをる一 ちりがみ三百 はぶらし

二 はみがき二

……私のきりつめた世帯道具を

青い帯紐でしめて

しっかりからだにつけ

どこへでも

さあ——

私は軍靴を踏み鳴らしながら

戦友の誰かが

私の小さな白木の箱を

この紐で

くくって帰ってくれることを考へた

そうして

小さい声を出して呼んでみた

「オカアサン——」

まじめで素直な、こういう若い兵士が、死を覚悟せねばならないいたましさにやりきれない思いがする。というより、彼が死んだ時のこの母親の気持を思う時、耐えられないのはこの詩の作者より読者であるというべきだろう。中国兵や中国の一般民衆に対して、何らの恨みも憤りも憎しみももたないこの若い兵士（前記「かれら」の作者と同一人）とこの母親が、命のままに死と隣り合わせに住まなければならぬ悲劇がここにある。が、戦争に死はつきものである

る。絶えず死を考え、死におびやかされる兵士には次のような詩稿がある。

「戦友の死」

(中地 清)

今日の夕ぐれ

やあ……と言って別れて

ものの五分もたたぬのに

もう はや

血の気のなくなった

むくろになって帰ってきた戦友をおもひながら

ごろつと

土手の腹に

はひころんで

黒い空の

星を数へてみる

「ある日」

(中地 清)

戦陣のちまたに

送ってきた

同窓会の名簿の

戦死者の名を調べ

自分の名前の横にも

太い黒線をひいては

又 数へなほす

冬の日の山腹

「黒い空の星を数へる」とは、死んでいった友人たちの数を数えているのにちがいない。「自分の名前の横に」黒線を引く心理も、常規を逸しているようだが、死と同居する戦場ではすこしも異常ではない。死神にとりつかれたようなこういう行為があたりまえな戦場こそが異常なのである。

右の二篇は、個人詩集「征旅転々」(昭和16年10月)に掲げられている。作者はそのあとがきで「もともと詩人ではない、場ちがいものの書きなぐりである」と述べ、さらに「同じ中隊にゐる兵隊の多くは、日ごろ、詩とおよそ縁の遠い人たちであるが、寝食とともにし、生死をともにしてゐる間に、この人たちは私たちが想像も及ばない詩人的な感覚をもつてゐることを発見して、おどろくと同時に、たいへん愉快になった。そこで、兵隊はみんな、文字を持たない詩人である……と考へた。」と、記している。絶対主義体制下において、兵隊イコール民衆という単純な図式で一般大衆をとらえることはできないが、作者の「兵隊はみんな、文字を持たない詩人である」という発見は非常におもしろい。作者はどうやらインテリらしく、一般兵士と自己を截然と区別しているが、民衆(兵士)のなかの詩精神を発見し、民衆と共に生死の境に住むうちに、民衆的な感覚をも無意識裡に内在させていったもののごとくみうけられる。

「雨」 (中地 清)

雨の詩なんか
作ったのは

どこの野郎だ
肌まで

ずぶぬれに

ぬれてみろ

この寒ぞらに

股の中まで

ぬれてみろ

にくらしいばかりで

詩なんか あるものか

このたわけものめが

そういえば、たしかに「戦友の死」や「ある日」の感覚は、インテリ特有の線の細さを露呈している。しかし、右の詩はかなりたくましい。ひところのプロレタリア詩のような長所も短所もそなえ、まるで別人の作のようである。

ところで、以上の詩篇は、すべて中国戦線での作品である。これが、絶対的な物量の優位を誇る優勢なアメリカ軍と戦闘を交える時点から、太平洋戦線での凄惨な様相が、彼等の思考や感情を一変させる。その代表は「ガダルカナル戦詩集」である。

井上光晴の、戦後に書いた同名の小説は、この詩集を素材として

いるわけだが、詩集の原著は、詩集とは名ばかりの32頁の小冊子で、毎日新聞社発行、六万部と奥付に記されているが、当時(昭和20年2月)既に入手困難な詩集であった。したがって、一般には内容もほとんど知られていない。僅かに井上の小説によつてうかがえるのみである。

周知のように、ソロモン海域に存在するガダルカナル島の攻防戦は、昭和17年秋から18年にかけての数ヶ月、文字どおり太平洋戦争の天目山として、両軍が奪つたり奪われたり死闘をくりかえし、あげく「転進」という、まことにきこえのよい造語を用いて、日本軍が全滅寸前に敗退脱出をした戦いであった。日米両軍は、まさしくこの戦いを境いに、攻防と場所を替えたのである。それだけに、この戦場がどれほどの極限状況を人々に強いたことか、あえて説明をこころみるまでもないであろう。

「埋葬」

太陽は青ざめ

焼け残ったジャングルの

ただれたボサからは

まだ煙がよろめいてゐる。

この荒涼たる黄昏に

紙のやうに皮膚をかはかして、

病葉の散ると共に

死を選んでいった君の生命。

すべてを棒げ切つて

肉ことごとく枯れたる腕よ。

かつきと見開いて、

暮色をうけしめてゐる眼差よ。

ああその飢えた手に掴んだ

激しいものは何だ。

その瞳に確信して

叫んでゐるものは何だ。

熱病といふべくあまりに熱い

悲願の中に身を埋めた友よ。

この憤りに満ちた風景の中で

君の血こそは静かに赤かつたのだが。

詠いだしからしてこの詩はすさまじい戦場をうつし出す。しかし不思議なことに、この詩も次の詩もそうだが、作者は友人の死をいとも、自らの死も覚悟しながら、敵を罵つたり、怒りを敵に向つてあからさまにぶちまけたりしない。専門詩人たちの戦争詩が、相手を罵倒することに終始し、それこそが戦争詩のテーマとして唯一のものとも思い込んでいるような詩情況であるにかかわらず、戦う兵士たちのそれが、そういう姿勢や倨傲さを示さないのはどういふことであろうか。しかしそのことについては文末においてふれることにする。

「われらは信ず」

ジャングルに深くこもれば
雨は夜々肌を洗ひ

壕内に日々を送りて

敵弾を常に浴びつつ

いつの日に友軍機飛び

糧来るやわれらは知らず。

されどただわれらは信ず。

われらは勝つと。

幾月ぞ、弾丸を撃たざる。

幾日ぞ、米を食はざる。

屋根なせる「星」の翼に

ジャングルに木のかげは失せ

嵐なす敵の弾丸に

つきつきに友は斃れぬ。

されど尚われらは信ず

われらは勝つと。

みかへれば瘡せらばへて

肉そげし頬よ、腕よ。

よし、弾丸は免れ得とも

長くよく生きてあるまじ。

友軍機いまだ飛ばざり
糧秣も遂に来らず。

然かも尚われらは信ず
御国は勝つと。

「ガダルカナル戦詩集」の作者は、編者大木惇夫によれば、吉田嘉七という軍曹だとのことである。作者名があとがきの中にだけ書かれているのはおかしいことである（表紙はむろん大木惇夫篇となっている）作者がどういう経歴の人かも不明である。作品は原作のままということだが、それにしても大木惇夫の「海原にありて歌へる」「雲と椰子」「豊旗雲」「神々のあけぼの」等、一連の戦争詩とこの詩集のほとんどの詩篇は、修辞も発想もかなり酷似している。が、内容のずっしりとした重さは、実戦の場に在った者のたしかかな実感に満ちているので、ここではその問題は問わず、大木の説くごとく、大木自身の詩が手本になっているとしたい。

一般に大木惇夫の戦争詩が重々しい響きをもつのは、一つには彼自身が従軍詩人で、南方戦場をも見、魚雷攻撃を受け、九死に一生を得た体験のなまなまさが大きく作用しているからにちがいないのだが、形式上では五七調の長歌をふまえているところによっている。「われらは信ず」は、そういう大木調の詩の典型である。極限的な凄絶さや、ぎりぎりの悲壮感が、文語五七調の重厚な詠嘆とないまざる時、死以外に出口のない絶望感にとらえられている人々（読者）が、それに向って吸い寄せられるのは必定である。井上の小説中の若い学生が「これこそ本物の勤皇だ」と感動するのは故なしとしない。

圧倒的せん滅的砲爆撃と飢餓状況の中で、死を目前にひかえ、その死を意義あるものと信じなければ、とうてい恐怖に耐え得ない作者が、「勝つ」ということを必死に願望することで死を乗りこえようともがきながらも、「友軍機いまだ飛ばざり、糧秣も遂に来らず」という、最後の絶体絶命の窮地においては、「われは勝つ」と言い切れず、「御国は勝つ」と言いなおさなければならなかった、さまざまの戦場のリアリティが詠い出されている。

「ガダルカナル戦詩集」は、むろん反戦の詩ではない。といって、好戦の詩であるとの断定を下すことも正確さを欠く。たしかに厭戦的なトーンに覆われてはいるが、危く侵略詩であることを免れ得ている唯一の証左は、これほどの絶望的状況に追い込まれながらも、むきだしな敵対心をぶちまけようとはしないとある。あるものはただ死の意義を見出そうとする必死な願いだけである。それはどこの行間にも鬼火のような妖しい炎となって燃えている。これはまさしく死の詩集以外のなものでもない。偽作又は補作という、大木への疑いを私が解消するのは、ここに最大の理由がある。大木といえども、これほどにすさまじい死生の門をくぐったことはないであろうからだ。そのことは次の詩においてほとんど決定的である。

「妹に告ぐ」

汝が兄はここを墓とし定むれば
はろぼろと離れたる国なれど
妹よ、遠しとは汝は思ふまじ。

さらば告げむ、この島は海のはて
極まれば燃ゆべき花も無し。

山青くよみの色、海青くよみのいろ。
火を噴けど、しかすがに青褪めし
ここにして秘められし憤り。

のちの世に掘り出なば、汝は知らん
あざやかに紅の血のいろを。
妹よ、汝が兄の胸の血のいろを。

戦争遂行のための何らの原理をも持ち得ない日本の兵士が、銃火の中へ突入するには、地縁や血縁といった素朴な媒介を設定する以外にどのような方法もありえなかったわけだが、ここでもそういった原則にたがわず、「妹」へのつながりを求めることで作者は死を自らに納得させようとする。だが、死闘の島ガダルカナルの兵士である彼にとつて、死は死以外の何ものでもなく、「憤」らずにはいられないむねんな意に満たぬものであった。作者がこの詩集の随所で用いる「憤り」という言葉は、死にたくないのに死ぬという、意味で使われており、かりにも死を名譽だというような愚かしさに堕ち込んではいないのである。「挽歌」と題する短歌形式の詩稿は、あまりにもはつきりと死を否定する歌である。

「挽歌」

われすらもかく悲しきに、

母君は

よくぞ散りしと
のたまうべくも。

敗戦間近のこの時期に、こういう歌を載せるということは、まことに奇妙な現象といわねばならない。死は美しく崇高であるという、いわゆる死の哲学が横行し、直接の戦争指導者だけに止まらず、自らは生死の圏外に身を置いたままのすべての文学者や思想家が、そういう思考体系にもとずいた悠久や大義や憂国を説いて、民衆をして一億玉碎への道をまっしぐらに突き進ませている時、僅か一篇ではあるが、「ガダルカナル戦詩集」四二篇の詩稿の中に、こういう歌がはさまれていることは奇異である。おそらく大木惇夫は、全篇にみなざる凄絶な戦場のリアリティに圧倒されて、この一篇をあえて削り得なかったであろう。

死はたとえどのように美化しようとも、死以外のものではない。吉田嘉七が、何十日という間、危機にさらされ続けたあげく、身をもって体得したものは、まさしくそういう論理であったに相違ない。ところで、吉田嘉七の詩が、語法的に大木惇夫のそれと酷似していることは前に述べたが、素人詩人の詩が、当時の日本近代詩の水準に、技術的な面においてもさして見劣りのしないものとなっているのは、単に戦場体験のなまなましさ起因するだけではないことは明らかであろう。あの激闘の中で「詩を書き綴りをりましたるも、恐らく自分一人ではないかと思つてをります。」という手紙が、大木に寄せられたと記されている（あとがき）が、詩篇の中にも「万葉をひもとく」という言葉がみられることよつて推測できるごとく、作者は「詩を書き綴り」「万葉をひもとく」きながら、生死の境

を彷彿していた詩人であるのだ。「ガダルカナル戦詩集」の秘密はここにある。驚嘆すべきことだが、それは又、彼の精神の動揺の振幅が、その座標をしたたかには揺がさなかったゆえんでもある。

さて、最後に、いささか結論めいたことがらを付け加えたい。それは、先に少しくふれた、専門詩人たちの侵略詩と、民衆詩人の戦場詩の、本質的に相違する側面の問題である。高村光太郎以下の詩人が、相手に人間を全く認めることをせず、激しく罵ることですらを正当化することに血道をあげたのに反し、戦場で直接に銃を執った彼等は、自己への問いに沈潜し、地縁や血縁に呼びかける場合も、窮極的には自問自答以外の何ものでもなかった。それは戦争を直接に知る民衆兵士が、押しつけられた戦争目的と現実の断層を自らの目で、皮膚で認識し、自己の内部にしか拠点を構え得なかったことと関係する。むろん、それが強固なものとなるにはかなりな不確かさや未熟さと抱合してはいたが、国家権力へのあいまいな認識しか持ち得なかった民衆にとって、過大な期待をかけることはできない。

一方、明白にすぎるほど明白なことだが、戦争は相手をののしることで勝ったり負けたり、生死が決定されたりするものではない。少なくとも戦場の兵士にとって、そんなことはなんの足しにもならぬたわごとである。ののしろうとののしるまいと、非情な砲弾は物理的に飛来しさく裂し、容赦なく人々の生命を奪いさる。敵をののしったり、味方に掛け声をかけたりするのは、そういう兵士たちをけしかけ死地に追いやる立場に立つ人間のすることであり、その位置でしか叫び得ぬ無責任な言辞というのほかはない。したがって専門詩人が、味方の死をいたむ時は、その指揮官に限られ、全員玉碎

の場合においても、悲しむよりは憎むことを教唆し、新たな掛け声にすりかえる。ここで、詩人の戦争責任について論じるのは本旨でないが、彼等の責任とは、まさにそういう文学的責任の謂いであって、侵略詩と戦場詩の識別区分も、ここに一線が引かれるべきであろう。そして、専門詩人への批判は、この時期の詩を、民衆兵士の詩篇を中心に据えて書き改めることで糾弾されることが望まれなければなるまい。

(付記)

戦争詩については、文中にことわったごとく、「はるかなる山河に」「きけわたつみの声」のほか、日本解放詩集（新日本詩人刊行会篇、飯塚書店昭25）等にも若干があり、雑誌「自由思想」昭36・7号には伊藤信吉編の反戦詩特集があるが、私は戦後に発表された詩篇については、故人の作品を除いて、それらを額面どおりには受取らないことにしている。戦時下の作品であるというはつきりした証拠があればむろん別である。（昭43・6・3）

—法政女子高校勤務—